

After the ruin, comes an architecture.

廃墟 (=ruin) は建築の荒れ果てた姿であるが、同時に自然と建築が融合しあって一体となっている姿でもある。そういった廃墟は人工物であるが、自然物に近く、それによって建築にはない特性を持っている。「After the ruin, comes an architecture.」はそういった廃墟から見て取れる特性を設計に適用したものである。建築と自然が相即的な関係にあるとき、建築はどんな格好をしているのか？自然はどのように取り入れられているのか？

本作品では設計に至る前に4つの習作を制作した。「ash-house」「blue egg」「bonsai」「ruin (in) ruin (in) ruin」においてさまざまな廃墟性を表現し、そこから建築設計へのヒントを得た。そして、図書館の設計では、基本形として車を反転させ積み重ねた形をつくり、それを展開た。さらに、植物を建築の一部に取り入れ、植物の力で建築の表情が変化するようにし、建築の一部である柱を外に出し、建築が外に広がっていくようにした。また、敷地である富山城址公園の四方を囲み、公園内部に自然を包み込んだ。そして、この図書館は柱や植物や本が、いろんな場所から見えるようになっている。

[目次]

[廃墟の表象史・廃墟論]

— 美学的に廃墟論を概観し、廃墟を観察する視点を設定する。



[廃墟探訪記]

— 設定した視点で廃墟を観察し、廃墟の持つ特質を抽出する。



[習作]

— 観察から抽出した特質を用いて、建築設計イメージを喚起させる習作を4つ制作する。



[富山市立図書館]

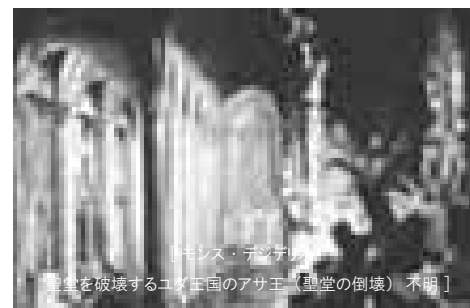
— 習作をヒントにし、最終的に富山城址公園を敷地に図書館を設計する。



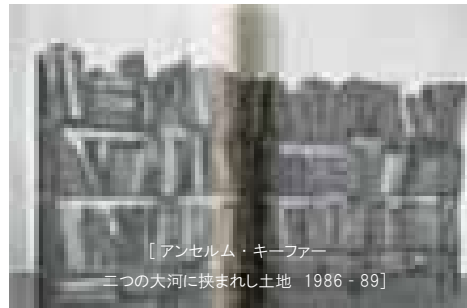
廃墟の表象史

マニエリスムの時代にキリスト教の創世記のなかにあるバベルの塔の崩壊や大洪水などの没落のヴィジョンが頻繁に描かれるようになった。ピクチャレスクの時代に至ると、ピラネージを代表とする廃墟画家が多数登場し、廃墟を模写した。その後、廃墟の断片を趣向する廃墟趣味が生まれた。20世紀に入ると廃墟の表現は多様化し、絵画における無人の表現、写真に写された廃墟、文学における廃墟の記述、立体作品などにおいて廃墟は表現された。それらの作品は破局の表現や崩壊後の建物の表現ではないが、廃墟らしさを強く感じさせるものであった。

19世紀以前の廃墟の表象



20世紀以降の廃墟の表象



このように廃墟の表象史を概観することで廃墟の表現が多様化し、破局、崩壊という直接的な廃墟表現とは異質な、観者の想像力を廃墟に駆り立てる表現方法が出現していることが確認できる。

廃墟論

美学研究者の谷川渥によれば、廃墟論は大きく分けて3つある。1つに廃墟を人間の意志と自然の必然性から捉え、廃墟が自然と精神が相即的な関係を保っている姿であることを明らかにしたもの。1つに廃墟を時間が関係し、そこに至る原因が複数あることを明らかにし、その原因を「人の仕業」と「時の仕業」とに分けるもの。1つに廃墟にはそこに至る過程と現在の状態があることを明らかにし、それぞれを「動態」と「静態」とに分けたものである。本研究では、「人の仕業-時の仕業」と「動態-静態」の指標を利用し、それらを掛け合わせ廃墟を観察する4つの視点を設定した。

「人の仕業」 ————— 「時の仕業」

「動態」 ————— 「静態」

人の手によって廃墟と化したもの

時の経過によって廃墟と化したもの

廃墟に至る過程

廃墟の現在の状態



廃墟を観察する4つの視点

① 「人の仕業・動態」

② 「人の仕業・静態」

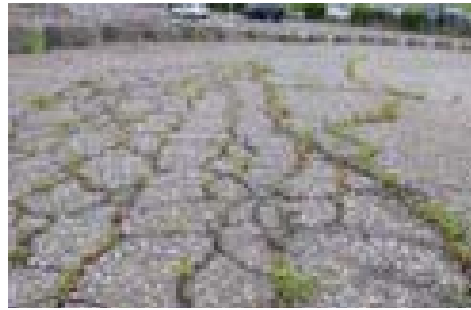
③ 「時の仕業・動態」

④ 「時の仕業・静態」

廢墟探訪記



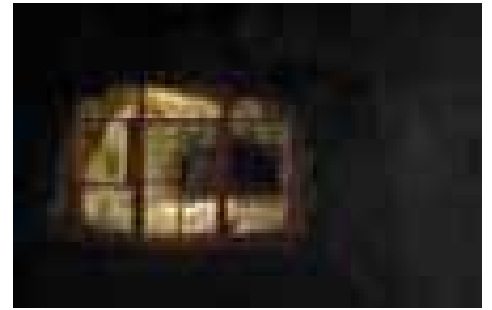
白石鉾山



倉庫廢墟 1



倉庫廢墟 2



象山地下壕



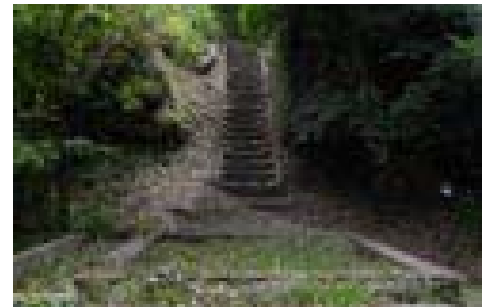
松代城址



七尾城址

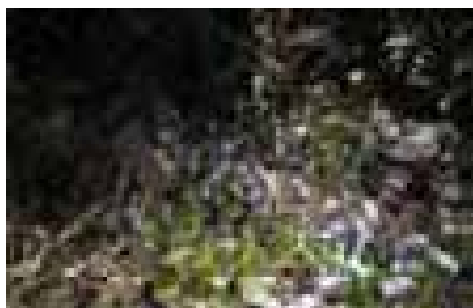


高岡城址



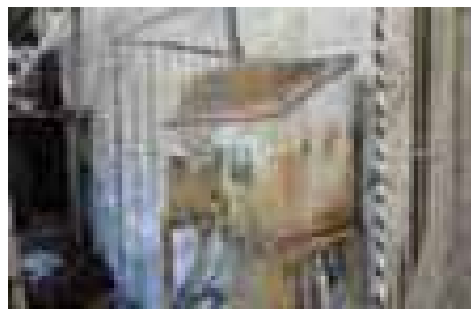
阿尾城址

① [人の仕業・動態]



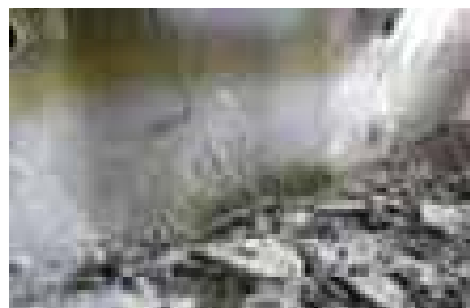
放置
侵入
損壊など
今後も繰り返される可能性あり

② [人の仕業・静態]



①の結果
機能が停止した人工物

③ [時の仕業・動態]

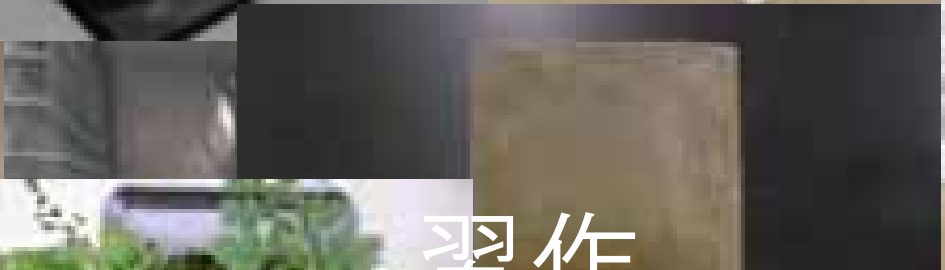


自然の力による
浸食
堆積
成長など
現在も進行中の作用

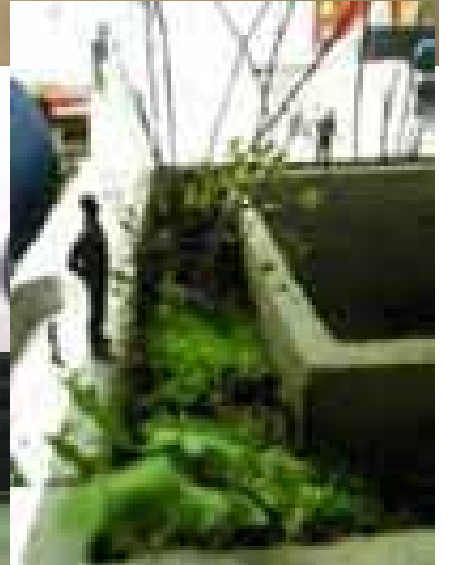
④ [時の仕業・静態]



③の結果
内部に侵入した自然
外部に流出した人工物



習作



[ash-house]

この習作は家型を型枠にコンクリートを固めた灰皿である。型枠をはずすときに型枠を燃やして、コンクリートに焦げ後を残した。つまり、燃えた家型の灰皿だから [ash-house] である。この灰皿は、家型という人工の形を燃やすという破壊行為の痕跡をコンクリートに残すことで、廃墟性を表現している。燃やされた家型はそこにはもうないが、人はその痕跡からそこに家型があったことを感じ取る。そして、それと同時に、そこにすべての人工物の未来を想像することもできる。





この習作は直径5mmほどの小さな粘土を核として、その粘土にグラデーション調に色を変えながら、何層にもペンキを重ねたものである。一日に数層ずつ約1ヶ月間続けると、およそ高さ60mmほどのたまご型のペンキの塊ができる。最終的にその表面を目の細かい水やすりで少しずつやする。

[blue egg]

そうすることで表面に微妙な変化が生まれる。この変化は風や雨などの自然の力による浸食を模したものであり、この[blue egg]が外部空間におかれることを想定したものである。また、表面の変化は自然の力だけによるものではなく、人が触れることによっても、少しずつ削られていく。そうして[blue egg]は人と自然の共同作品となり、人工物とも自然物ともつかないものになる。



経過すれば、植物によってコンクリートの壁は削られ、真ん中の空洞には植物が侵入してくる。それでもこれは建築である。

[bonsai]

この習作は、2枚の口の字形の壁の間に土を充填しそこに植物が植えられている盆栽であると同時に、真ん中に空洞のある建築の模型でもある。また、コンクリートの壁には複数の小さな穴が穿たれており、水をやればそこから水が流れ、時間が経てばそこから植物が生えてくる。さらに時間が



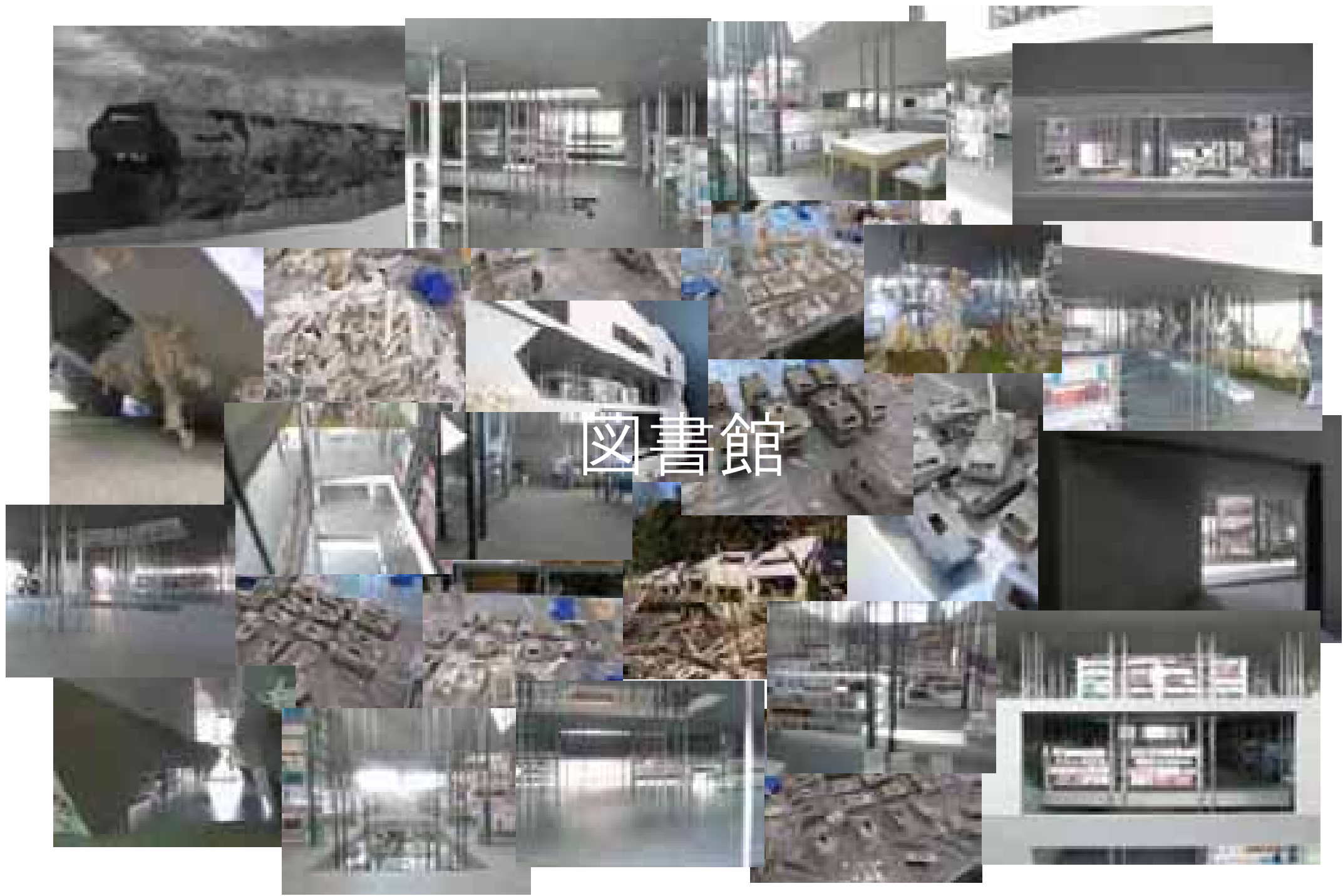
[ruin (in) ruin (in) ruin]

この習作はレンガの形に切ったスチレンペーパーを材料としている。それを家型の形に積み上げたものを3重につくり、部分的に崩すことで廃墟を表現している。外側の家型を崩すことで内側の家型が見えるようになる。その段階では外側が廃墟、内側が建築のように見える。そこからさらに、

内側の家型も部分的に崩す。しかし、部分的に崩れながらも、それぞれの家型が部分的に内部空間を作るようにすると、どこまでが内部でどこからが外部なのか曖昧な状態になる。完全に崩れてしまえば、瓦礫しかなくなるが、崩れながらもかろうじて建築である状態、その状態が廃墟であると

言えるかもしれない。やはり廃墟とは、いまだ建築なのである。





図書館

周辺環境

[富山市立図書館概要]

建築面積 4,815 m²

床面積 12,577.8 m²

階数 4階（一部5階）

用途 図書館

蔵書数（開架） 約35万冊

（閉架） 約40万冊



富山ライトレール



JR 富山駅



総曲輪通りと路面電車

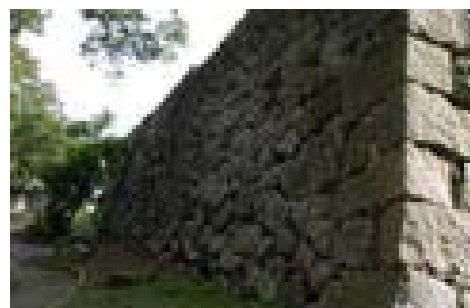


路面電車

堀



石垣



松川



現在の富山市立図書館





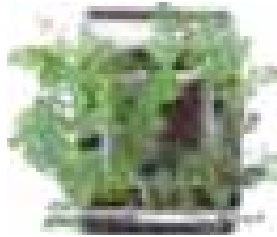
[basic pattern]



[Hamm, Manfred, *Dead Tech*, Sierra Club Books, 1982]

ここでは、習作の [ash-house] がヒントになった。灰皿で家型を機能停止に見せたのを、設計では車を機能停止に見せた。車の形をしたコンクリートの塊を反転させて重ねた。これは、捨てられた車が積み重ねられている表現である。これ以降これを基本形として設計を進める。

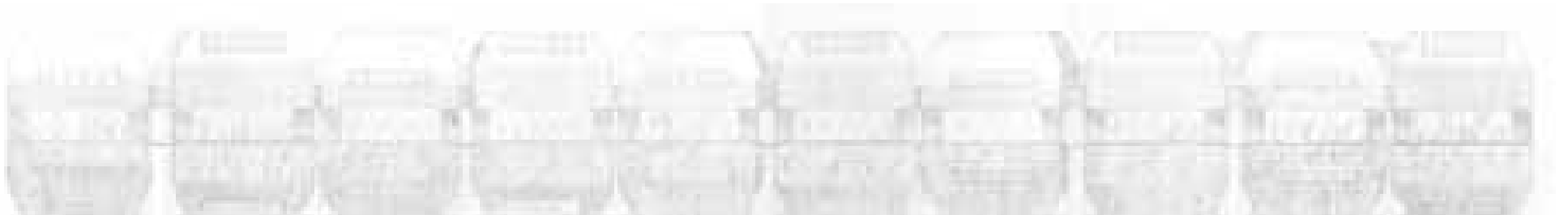




[planting design]



ここでは、習作の [bonsai] と [blue egg] がヒントになった。図書館の外壁部分に [bonsai] と同様に土を充填し植物を植え、外部に面した壁には複数の穴が穿たれている。そして、植物が育つにつれてこの図書館は表情を変えていく。



Legend :1)Circulation counter :
 2)Magazine library : 3)Cafe
 space : 4)Children's library :
 5)Closed stacks : 6)Office :
 7)Reading room



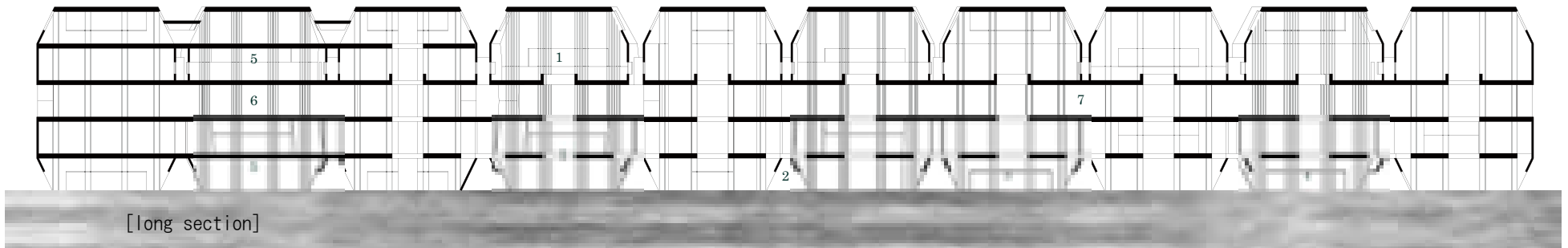
[short section]



[column design]

ここでは、習作の [ruin (in) ruin (in) はエントランスを示す目印ともなっている。内部にあるものが外に出てきて見えるようになっている状態を図書館では柱を使って表現した。本棚のレイアウトにあわせて約4mスパンに配置した4本1束の柱を外部まで延長し、外から見えるようにしている。また外部の柱

そして、この図書館は車の形をしたコンクリートが作る領域と、外部にまで延長した柱が作る領域が重なり合い、形成されている。

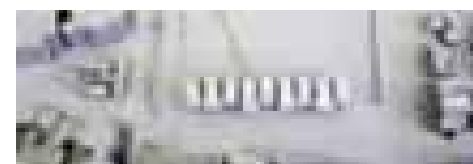
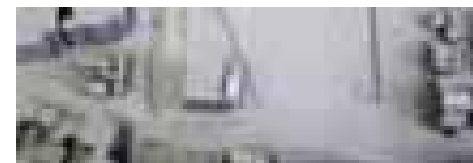
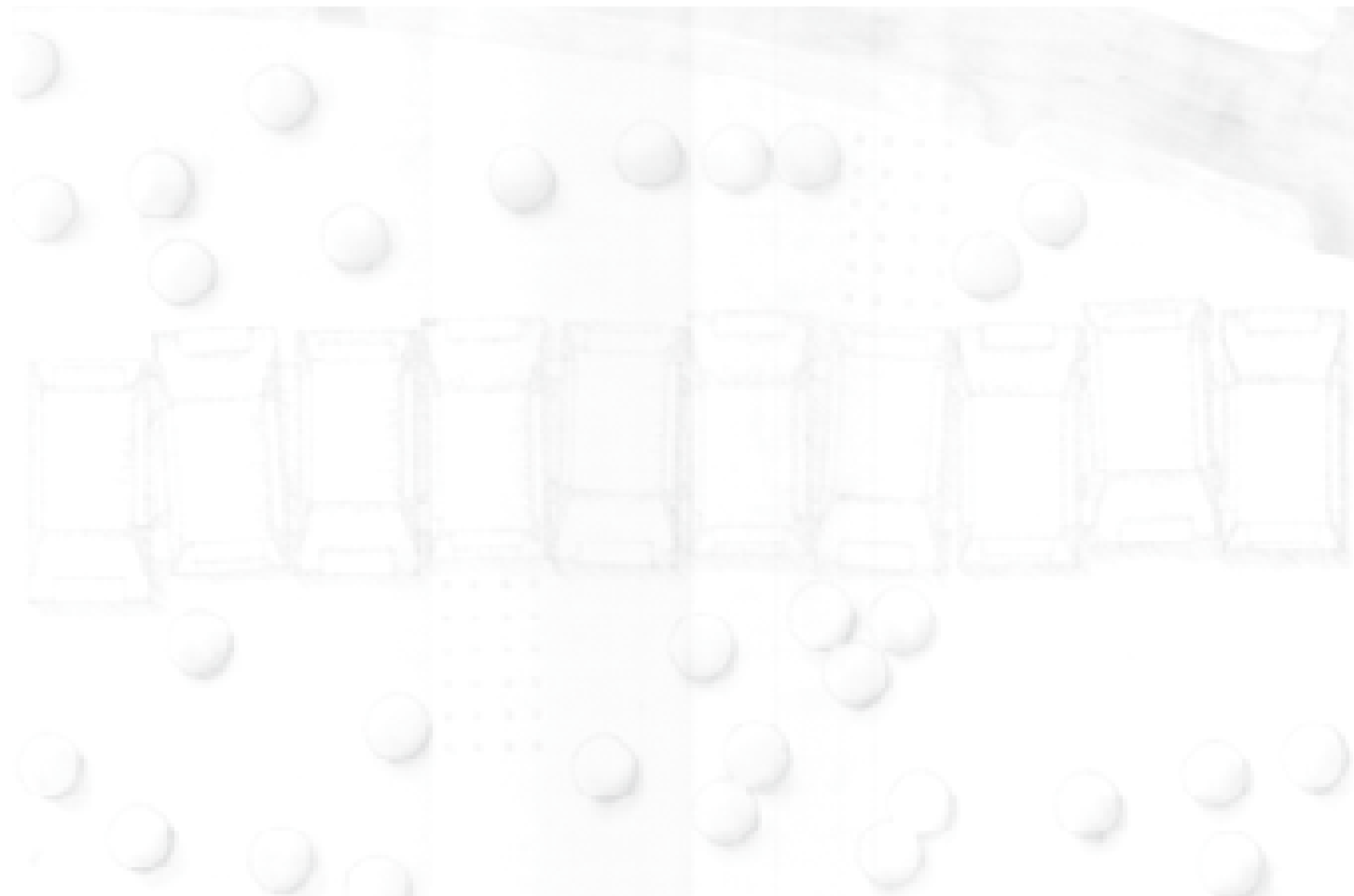


[long section]

[extension idea]

これは、年々蔵書が増えていく図書館に対して、建築を増築させていくことで対処する方法である。ここでは、観察から得られた①[人の仕業・動態]の特質を直接利用している。車を反転させた基本形を蔵書に合わせて増築させていく際に、少しずつらしながら増築させる。その少しのず

れが放置されたという過程を感じさせる。また、この増築は蔵書が増え続ける限り繰り返される可能性がある。今回の計画では10棟まで増築させた。





[locational design]

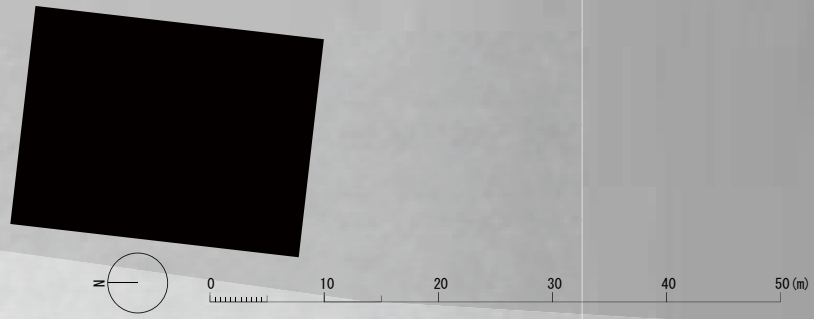
ここでは習作の [bonsai] をヒントにした。3方を堀、石垣、川によって囲まれている敷地に対して、残りの1方に図書館を直線状に配置することで、公園の内部に自然を囲みこんだ。そして、公園の内側は自然の状態に戻っていく。



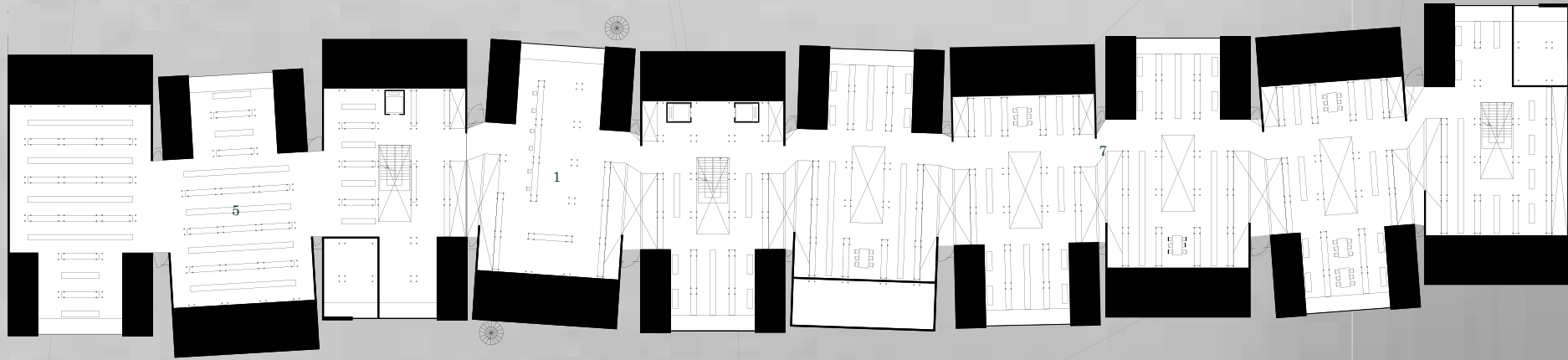
Legend :1)Circulation counter :
2)Magazine library : 3)Cafe
space : 4)Children's library :
5)Closed stacks : 6)Office :
7)Reading room



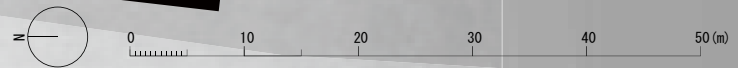
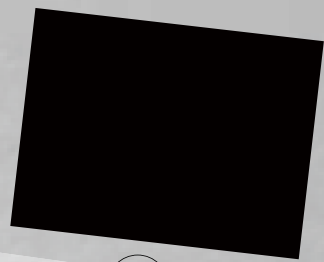
[ground floor plan]



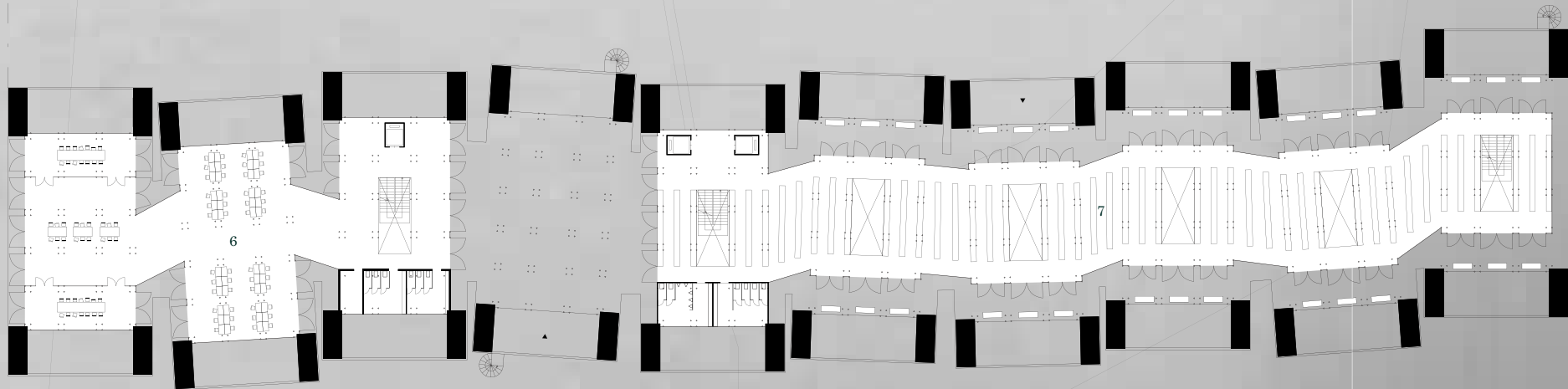
Legend :1)Circulation counter :
2)Magazine library : 3)Cafe
space : 4)Children's library :
5)Closed stacks : 6)Office :
7)Reading room



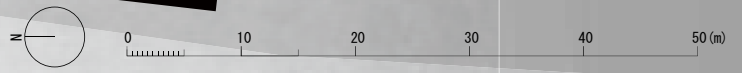
[first floor plan]



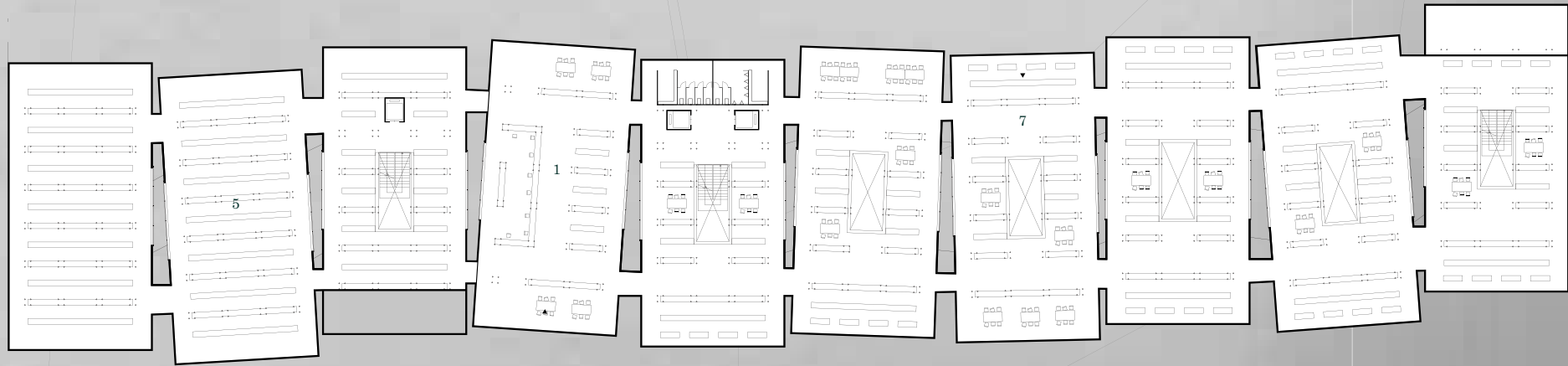
Legend :1)Circulation counter :
2)Magazine library : 3)Cafe
space : 4)Children's library :
5)Closed stacks : 6)Office :
7)Reading room



[second floor plan]



Legend :1)Circulation counter :
2)Magazine library : 3)Cafe
space : 4)Children's library :
5)Closed stacks : 6)Office :
7)Reading room

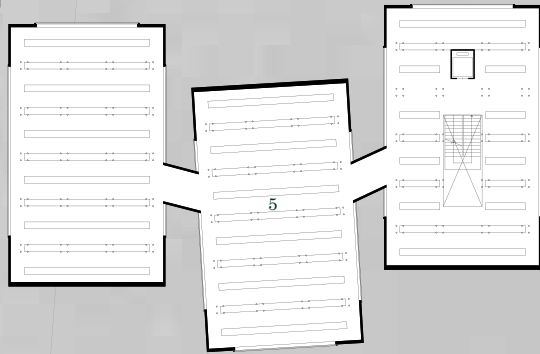


[third floor plan]



0 10 20 30 40 50 (m)

Legend :1)Circulation counter :
2)Magazine library : 3)Cafe
space : 4)Children's library :
5)Closed stacks : 6)Office :
7)Reading room



[fourth floor plan]



0 10 20 30 40 50 (m)





























